## 第一章　斎藤月岑の生活誌－『斎藤月岑日記』を通して

### 第一節『斎藤月岑日記』について

斎藤月岑は、文化元年（1804）、江戸の町名主[7]斎藤幸孝の子として生まれて、神田雉子町に住んでいた。父が文化十五年（1818）に亡くなったとき、彼はまだ十四歳であったが、すぐ斎藤家の九代目として町名主を襲職した。そして、居住町である神田雉子町のほか、三河町三丁目、同四丁目、同三丁目裏町、同四丁目裏町、並びに四軒町と合計六つの町を支配する名主を勤め、明治十一年（1878）三月六日に亡くなった。

『斎藤月岑日記』（以下、「日記」と略称する）の月岑自筆原本三十六冊は、東京大学史料編纂所に所蔵されている。収載期間は、文政十三年（1830）正月元日から、明治八年（1875）十二月三十一日までの四十六年間にわたるが、途中、天保三年（1832）、天保五年（1834）、天保八年（1837）、天保十三年（1842）、嘉永五年（1852）、嘉永六年（1853）、明治四年（1871）、明治五年（1872）、明治六年（1873）の総計九年分を欠いている。

本論文で使うのは、「日記」の原本をもとにして東京大学史料編纂所で編纂され、岩波書店から刊行された活字本[8]である。この活字本の第一冊には、文政十三年（1830）から同六年（1835）までの四年分が収められており、一九九七年三月に出版された。引き続き、二年ごとに一冊が出版された。「日記」の三年分を収めた第五冊以外、第一冊から第四冊までには、すべて四年分が収められている。

「日記」についての今までの研究は、主として西山松之助と森銑三との「日記」の原本の抄録に関係するものである[9]。今まで最も新しい研究は、おそらく西山が 1979 年に発表した「江戸の町名主斎藤月岑」という論文である。それからは、ほとんど研究されていないと言える。

「日記」が始まった年[10]は、文政十三年（1830）であった。その年には、月

---

[7] 『岩波日本史事典』によると、「町名主は近世における江戸の町役人。給分は町々からに賄われる。江戸町年寄の支配を受け、住民への触（ふれ）の伝達や公役徴収、町からの上申書提出、町内の家屋敷売買や借家貸借管理などの業務を行ない、町方行政の末端を担った。町奉行諮問への答申、名主独自の通達の作成、争論の調停などを行うこともあった。」（181 頁）

[8] 東京大学史料編纂所編『大日本古記録　齋藤月岑日記（一）～（五）』（岩波書店、1997－2005）

[9] 森銑三『斎藤月岑日記鈔』汲古書院、1983 年
（もとは『本道楽』第八十一号-第九十七号所収、1933 年）
西山松之助「斎藤月岑日記　抄録」『東京教育大学研究紀要』、1969 年
西山松之助「斎藤月岑の明治」（『史潮』第 106 号所収）、1969 年
西山松之助「江戸の町名主斎藤月岑」『江戸町人の研究』吉川弘文館、1979 年

[10] この年以前、月岑の日記もあったのではなかったかという疑問について、森銑三は、日記の「第一冊は第二冊以下と形式の一致を欠くものが多く、殊に最初の部分など、文字も特別に

岑は二十六歳の年齢で、ちょうど結婚しての翌年で、十四歳の時に町名主の家業を受け継いでからの十三年目である。この時に「日記」が始まった理由は、おそらく月岑が家庭を作ってから、仕事の内容にも慣れていて、「日記」を書く余裕ができたからではなかったかと考えられる。月岑は「日記」を書き始めてから、天保の改革、アメリカの大使ペリー来航、明治維新などの歴史上の大事件を経て、亡くなる三年前に日記をつけるのを止めたのである。それは七十一歳のときであった。

前後四十六年間の長年にわたる「日記」を残したのは、月岑の記録癖[11]と無縁ではない。「日記」のなかには特に丹念に記録された事柄がある。彼はその後の著作『東都歳事記』『武江年表』『声曲類纂』などを編纂するため、一生懸命に「日記」をつけていたのではないだろうか。

「日記」の各日の記載内容は、大抵数行に過ぎない。当日の天候から始まって、月岑が誰と一緒に何事のためにどこに行ったか、家族の誰が何をしたか、誰が訪れに家に来たか、社会の出来事などを極めて簡単に書き付けてある。そして記載した事項について、月岑は感想や批判などをほとんど書いていない。また筆者しか分からない記号や人への特殊な呼び方なども、しばしば「日記」に出ている。もともと日記は筆者自身の備忘録のようなもので、他人に読ませるためのものではないので、それは当然なことであろう。各日の記録は簡略とはいうものの、月岑の個人の日記から天保から明治へかけての動乱の最も激しかった時代の世相の一端を窺えると考えられる。

しかし本論文では、日本の開港以前の江戸にすんでいた人の生活を中心に考察したいので、ペリー来航の 1853 年以降の日記は割愛する。それらの検討は今後の課題にしたいと思う。

では、「日記」に記されている内容は、どんなものであろうか。そこには名主の公務、年中行事、生活と遊びなどの記録が含まれている。日記を読んで第一に感じるのは、月岑は名主としての勤務に大変忙しい生活をしていたということである。それは名主の仕事の細部に関する記録が、ほとんど毎日見られるからである。

現在までの名主の仕事内容に関する研究から、名主の勤務は、支配する町に住んでいる町人の生活の広範囲にわたっていることが判明している。石井良助は『江戸時代漫筆』のなかで次のように述べている。

---

大きくて、他との調和を破ってゐることから考へて、月岑の日記は、やはり文政十三年からつけ始められたと見るべき」と考えている。

[11] 吉原健一郎『江戸の町役人』（吉川弘文館、1980）166 頁。
記録癖は当時の町名主など知識階層のなかにあったという。

名主の仕事は繁多ですが、町人生活のほとんど全部にわたっています。異変の改、火元の取締、消防、人別調、宗門改、不動産登記、訴訟の勧解および補助、質入れその他の証文の奥書加印、町触の伝達、公役の催促徴収のごときが、その主要なものでした。訴訟の勧解というのは、訴訟ことに金公事といわれた利子附無担保の借金の訴訟につき、被告支払の名主が原告との和解を斡旋することであります。[12]

この段落を読むと、法律や訴訟に関する部分に片寄りすぎていると考えられるかもしれない。しかし実際、「日記」から読み取れる月岑の仕事で最も多く記され、おそらく一番時間がかかっていたと考えられるのは、支配町内の人たちの訴訟に関することである。それに、ほかの名主との付き合い、町年寄との交渉、南北の奉行所[13]への出勤、将軍の御成り、江戸城への登城などもこまかく「日記」に記録されている。

そのほか、火事の記録は驚くほど多かった。火事が起こらないように町内を見廻るのは、当然町名主の責任であった。風がはげしく吹いている場合はもちろん、そうでないときにも、火災を予防するための巡回を行わなければならない。月岑が近隣の名主たちと協同で町の見回りをしている記録は少なくなかった。しかし、このように注意深く火を出さないように心がけていても、ほかの町からの類焼に遭うのは仕方がないことであった。月岑は、町名主の役所として使われていた自分の家も度々全焼させていた。火事と喧嘩は江戸の華と言われるほどに、江戸では本当に火事が頻発したのが分かるのである。

次は、斎藤家の年中行事と家族についての記述も見ていく。

「日記」によると、月岑と一緒に神田にある居宅に同住していた家族のメンバーは、祖母、母、妻のおれん、養子の久次郎、娘の麻、娘のおはる、実子の喜之助であった。祖母は、「日記」が始まった一年目の八月十八日に亡くなった。その後、この祖母の年回忌は時々「日記」に現れる。月岑は少年のときに、父を失って、十五歳のとき以来ずっと母と一緒に生活してきた。そのためかもしれないが、「日記」を読むと月岑が母を大切にしていたこと分かる。また彼には二人の姉がいた。姉が「日記」のなかに登場したときには、すでに嫁に行っていた。したがって一緒には住んでいなかったが、往来は頻繁であった。二人の姉婿も名主をしていたので、月岑とは付き合いが多かったようである。

---

[12] 石井良助『新編　江戸時代漫筆　上』（朝日新聞社、1982）17 頁。

[13] 『江戸学事典』によると、町奉行は江戸幕府の職名である。幕府の重要都市の民政を管理するためにおかれた。町奉行所は、役所と同時に役宅であった。呉服橋門内にある役所を北町奉行所、数寄屋橋門内にある役所を南町奉行所と呼んでいた。

そして、「日記」には子供が多く登場する。養子の久次郎は天保元年十月、二歳のとき、小網町の姉から貰った。久次郎は幼名で、成人になってからは亀之丞になった。久次郎が月岑の子供になる前、姉の娘が時々家に泊まりに来ていた。月岑は自分の家に子供がいなくて、寂しいと思ったから、姉の娘にきてもらったのではないかと思われる。久次郎が来てから二年後、娘のあさが誕生した。しかし、翌年に亡くなった。わずか一年の寿命だった。次の娘も成人になる直前に病気で亡くなった。「日記」には月岑と子供たちの触れ合いが多く見られるので、月岑は子供を育てることに熱心だったのであろう。しかし、その時代に子供を順調に成人になるまで育てるのは難しかった様子である。

名主の仕事は、終日居宅でするわけではない。町のなかをあちこちを歩いてしなければならないことがある。仕事のため以外に、月岑は自分の活動のためにもよく江戸の名所を廻って見物したりした。毎月十日には、必ず虎の門の金毘羅大権現へ参詣に行った。都合が悪かったときには、別の日に行くことにしていた。それに次いでは、真土山の聖天宮と浅草の観世音にもよく通っていた。そのほかの寺社へも参拝していた。開帳へも行った。見せ物を見に行き、芝居にも行った。一人で行くときもあり、家族を連れて行ったり、ほかの名主たちと同道して行ったりしたこともある。同じものを見るために何度も足を運んだこともあった。『東都歳事記』や『声曲類纂』などの著作をたくさん残した月岑は、このことに非常に大きな興味を持っていた。

「日記」に見られる斎藤家の食生活も興味深い。家族や友達と一緒に寺社参りに行ったときには、ほとんど外食している。あるいは八百善のような高級な料亭に行き、また手軽にそば屋で食べていたこともあった。それに、自宅において時々自分でそうめんを作ったり、草餅や牡丹餅などのお菓子を作ったりした。それを家族と一緒に食べるだけでなく、人にも配ったりしていた。食べ物にも強い興味を持っていたのではないかと思われる。

月岑は文化人としてほかの知識人とも付き合った。それは「日記」のなかにしばしば見られる。まずは、著作である『江戸名所図会』の編纂から出版に至るまで、複数の文化人から協力を得た。挿絵を担当する長谷川雪旦と序文を書いた片岡寛光とは、もともと親しかったため、名前はよく「日記」に記されている。松平冠山のような普段は多分知り合う機会もない大人物も、『江戸名所図会』に支持を表すために、住まいにまで訪れに来た記述もある。そして、版元の須原屋とはもちろん交流が多かった。

私たちはこの「日記」を通して月岑の生活を知り、その家庭を知り、併せて

当時の社会と時代背景の一端にも触れるができると思われる。「日記」が具体的に示す生活の様子を次の節に紹介し、それについて検討したい。

國立政治大學
National Chengchi University

第二節　月岑の生活誌

本節では月岑の日常生活を見ていく。彼は毎日をどう送っていたのかということを理解するため、まず次の一ヶ月分の「日記」を見ていきたい。これは「日記」が始まったころの文政十三年一月の記録[14]である。月岑二十六歳である。

> 元日、晴天、早朝より年始ニ出る、昼後、平田同道外神田廻る、普勝氏・遠藤氏来る、舞玉之畫すり物出来る、

毎年の一月一日に新年の挨拶に行くことは、月岑の慣例である。平田は新銀町の名主平田宗之助、普勝氏は小網町一丁目の名主普勝伊兵衛で月岑の姉婿である。遠藤氏は東湊町二丁目の名主遠藤七兵衛で、彼も月岑の姉婿である。舞玉は繭玉のことで、正月の縁起物である。すり物は版木を用いて刷ったもので、当時の印刷物である。

> 二日、曇、昼後雨、上田へ斗行、上田文之助子来る、

上田文之助は月岑の国学の先生である。ここの「～子」は敬称であろう。

> 三日、晴天、御城へ御年頭出る、浅草並真土山・上野大こく天参る、

正月三日に江戸城に挨拶に行くのは毎年の慣例である。以後数年間の「日記」にも見られる。浅草と真土山（待乳山）聖天宮は月岑のよく行く所である。上野大黒天は寛永寺護国院を指している。月岑の著作『東都歳事記』によると、上野護国院大黒参りの条について、

> 大黒天の尊前へ備ふるところの餅を湯に浸して、参詣の諸人にあたふ。これを大こくの湯、また御福の湯といふ。これを飲めば福智を得るといへり[15]。

と述べてある。

> 四日、晴天、八丁堀御礼、足痛ニ付山吹迄出、八丁堀へ不廻、満願寺御礼来る、

八丁堀は、町奉行の与力・同心の屋敷があった所である。山吹は鍛冶町

---

[14]『齋藤月岑日記　一』、2－5 頁。
[15]『新訂　東都歳事記　上』46－47 頁。
本論文では市古夏生・鈴木健一校訂『新訂　東都歳事記　上・下』（筑摩書房、2001）を使用した。

の料亭の名前で、月岑などの名主たちの月並の寄合がここで開かれていた。

五日、天氣、風、三社流鏑馬見ニ行、八つ時過帰る、安間氏・相模屋・久先生来る、小網丁より年頭来る、雪堤子留子来る、

三社は浅草寺三社権現である。『東都歳事記』によると、正月五日の条に、流鏑馬について、

午刻社人本社に至り祝詞・神楽を奏し、のち麻上下を着したる者、片面に鬼といふ文字を書きし的を竹の先へ付けたるを持ちて、鬼の前駆す。鬼に出で立ちたる者、これに添ひて出づる。社人騎馬にて鬼を追ひ、本堂を廻りてその年の恵方より始め、天地四方へ矢六筋を放つ。諸人この矢を拾ひて守りとす。ただし弓矢は真の物にあらず、仮初につくりし物なり[16]。

と書かれている。

八つ時は今の午後三時ごろである。久先生は月岑の画の師匠谷口月窓の養子である。小網丁は前述の普勝氏、雪堤は長谷川雪旦の子でともに画家である。父と共に月岑の著作『東都歳事記』の挿絵を描いている。

六日、天氣、支配礼廻る、湯立る、栗崎氏被参、

支配するところに挨拶に行く。お風呂に入る。栗崎氏は奥医師、江戸幕府の医官である。彼は月岑の四日の足痛のために来たのであろう。

七日、天氣、御番所御礼ニ出る、夕方、深川油堀火事、

御番所は町奉行所のことである。当時の通称である。

八日、雨、初雷、市左衛門、今日より出来物、歩行不成、

市左衛門は月岑自身のことである。日記の中で、月岑は自分のことを「月岑」や「幸成」と呼んだことがほとんどない。また、他人のように自分のことを記すのはおもしろい。歩けないようになっということは、前からあった足痛がひどくなったということであろう。

九日、天氣よし、長崎屋来る、

[16]『新訂　東都歳事記　上』48 頁。



國立政治大學 National Chengchi University

ここの長崎屋は、幕府に拝謁のために江戸へ来るオランダ人の定宿である長崎屋であろう。

十日、天氣、御成濟出来もの付不出、夜、高木より酒一舛・目録一分よこす、

御成は将軍が江戸城から外出することである。御成のとき、名主は警備のために将軍の通る道に出勤しなければならない。しかしこの日、月岑は出来物のために行けなかった。高木は、馬喰町の名主高木源七。お酒をもらった。

十一日、天氣、風、四谷辺火事、山本兵太夫殿被参、

山本兵太夫は北町の同心である。この日、月岑の家に来た。

十二日、天氣、風、長次郎栗崎氏へやる、膏薬もらう、

長次郎は、書役、月岑を補佐した事務職員である。よく月岑に代わって仕事をしている。前の出来物はまだ治っていないので、長次郎を医者の所に行かせて膏薬をもらっている。

十四日、天氣、明神様御神楽不参、夜、下谷仏店法華寺やける、

神楽というのは、神を祭るときに神様を慰めるために演ずる舞楽である。「日記」によると、毎年の正月十四日に、神田明神社で神楽の儀式が行われていた。

「明神様御神楽へ出る」「浅草へ年始ニ行、明神様御神楽へ出る」「神田御神楽へ行、久次郎連行、夜六半頃かへる」「神田御神楽へ行、久次郎連行」「明神神楽興行、組合へ頼ミ不出」「神田御社定例神楽御初穂南一、竹内氏（名主）へ渡し頼む」「明神様御神楽へ廻る、組合は此の方並びに亀之丞、小藤氏・久保氏・沢田氏・飯塚出席する、夜五前帰る、」「明神様御神楽へ行く、（略）夜四つ頃帰る」「明神様御神楽に付出る、夜五つ頃帰、（略）」「明神様御神楽へ出る、夜四前帰る、（略）」「明神様御神楽出る、亀之丞も出る、五つ頃帰宅、人数五十三人也、」「明神様御神楽行、夜五つ時半頃帰る、」

以後数年の日記を見ると、月岑は仕事のために神田明神社の神楽に行ったこ

とが分かる。おもしろいのは、養子の久次郎を連れて行ったことである。十一歳と十二歳の時のことである。そうした理由は、多分二つがあると思う。月岑は、子供は自分のお父さんがどんな仕事をしているか分かるように、連れて行ってあげたのである。神田明神の神楽は、子供も見て楽しめると思ったからでもあろう。

この日の夜、また火事があった。今回はお寺であった。お寺は寺社奉行の管轄範囲なので、月岑の手が届くことではない。しかし、火事の類焼を心配して記したのではなかろうか。

十五日、天氣、栗崎さま来る、上田文之助子来る、

医者がまた来た。国学の先生も来た。

十六日、天氣よし、亀戸御初穂而已上る、普勝氏来る、

正月十六日（偶に十五日）には、亀戸天満宮には大御食調進の儀式がある。正午から、魚、鶏、野菜、お菓子と果物などの七十五種類の料理を神様に供える。月岑は、ほとんど毎年行っていた。

初穂は、神仏へ奉納する金銭・食物・お酒などである。この年、月岑は亀戸へ行かずに、初穂だけをあげたのだけである。天保四年の日記によると、

亀戸七十五膳へ行、深川大島林栄殿へ廻る、梅やしき梅未早し。

と記されている。亀戸の天満宮の東三百メートルくらいのところに、梅屋敷という庭園があって、梅が有名である。梅についての記述は天保十三年の日記にも、

亀戸七十五膳へ行、飯塚真蔵と同道にてかへる、梅まだ早きより也、

と記されている、また天保七年には、

亀戸へ行、帰り河津・平田・小藤・斎藤・久保倅・岡村倅、梅川にて夜食たべる、朝風、げいしゃおさだ・あづまやおよねよぶ。

とある。月岑は、亀戸に行ってから、同道していた人たちと、梅川というところで、食事をした。三人の芸者を呼んだ。

国立政治大学 National Chengchi University

月岑は、正月亀戸に行く時、天満宮の七十五膳のために行って、その後、梅の花見、または友達との食事を楽しんでいた。

十七日、天氣、茂太子来る、

茂太子は、富山町名主飯塚市蔵である。通称茂太郎である。

十八日、天氣、
十九日、天氣よし、油町かもなんばん近所昼八ツ時頃出火、友啓来る
二十日、天氣、御成済、昼後曇ル、栗崎さま来る、夜、雨降、長さきや来る、

医者がまた来た。長さきやは、前に出た長崎屋であろうか。

廿一日、天氣、飾久かミさま来る、友啓殿来る、霊岸嶋大助妻来る、大久保隠居病死、相模屋来る、

大久保隠居は、元芝中門前名主である。

廿二日、曇ル、相模屋来る、吉右衛門一件、日延当日、長次郎出ス、

「吉右衛門一件」は訴訟関係の記録である。この日、月岑本人は行かず、書役の長次郎を代理人として行かせたのである。具体的にどんな内容の訴訟か日記を見ても分からないが、この「一件」は簡単に解決できないことが日記で判明する。なぜかいうと、この一年間の記録の中に、関係する記述はよく出てくるからである。この日に次いで、二月二日の夜の立合、同四日、七日、七日、十七日の日記には、すべて「吉右衛門一件」について書かれている。この年を通じて、またしばしば出てくる。最後の記録としては、十二月六日の、

四丁目吉右衛門一件出、御下ケニ相成ル、

である。この訴訟は、ほぼ一年間がかかってやっと終わったのである。それに、この件が進行していた間に、またほかの訴訟もあったのである。

廿三日、天氣、寒し、友啓来る、小網丁より、使来る、

廿四日、天氣、上田文之助子来る、梅枝もらう、夜、小網丁ねへ三泊りニ来る、

国学の先生がまた来た。ねへ三は、姉さんのことである。よく実家へ泊りに来る。

廿五日、天氣、岡村氏・国友氏来る、

岡村氏は、小柳町名主岡村庄兵衛である。

廿六日、天氣、小網丁・遠藤より使来る、大坪代来る、屏風張交はる、

大坪代は、本両替町名主である。

廿七日、曇り、大久保仏参、出来ものニ付不参、上野へおつか三之ごま、良助ニ上に行、片岡氏・茂太子来る、おつか三若林ニかへる、

この日は、二十一日に亡くなった名主のお葬式である。月岑は出来物で、行かなかった。おつか三は、月岑の母のことである。ごま（護摩）は、神様の前で、護摩木を燃やし、人の悩みや災難を燃やすことの象徴で、息災などを祈願することである。片岡氏は、松永町名主片岡正蔵である。

廿八日、天氣、大久保より引菓子来る、遠藤氏来る、遠藤氏よる来る、

引菓子は、祝い事や仏事などの際に、引き出物として客に出す菓子である。

廿九日、天氣よし、湯立る、

お風呂に入ったのである。

以上は、三十七年分の月岑日記の一ヶ月分である。抄録したのは、少ない比率であるが町名主である月岑の毎日の様子が大略見えると考えられるからである。ただし、単に一ヶ月の生活の様子を通してだけでは、月岑は生活の中にどのようなことに関心を持っていたのかは見られない。そこで、このことについて次の節で述べたいと思う。

國立政治大學 National Chengchi University

## 第三節　月岑の性格―旺盛な行動力

### ⑴ 人間関係の重視

月岑日記は、前述のように、天保元年の新年の挨拶から始まっている。まずは、同じクループにいる名主たちへ、自分が不都合な時、いつも勤務をカバーしてくれる好意に感謝の気持ちを表している。

そして、立派な礼服を着て、将軍様に年頭の挨拶をしに江戸城に入る。しかしながら、挨拶の儀式というものの、自分は何を言っても将軍様が聞えない遠いところに立っているだけである。それも仕方ない。何といっても、将軍様は、向かい合って座って世間話をすることができる人ではないのである。そう思いながら、儀式は無事に終わった。

江戸城を出る途中、今の時期は、梅が未だ早いかな、と『江戸名所図会』に書かれた梅林坂を思い出した。数百株の梅樹があるそうだが[17]、江戸城の中にあって、見ることができないのは物凄く残念である。亀戸に行く時、梅屋敷によって満開になる梅を見ればいいと自分を慰めるように考えていた。

下城してくると、御礼に行かなければならない人を少々計算したら、のんびりしてはいけないと頭で分かっていたが、せっかくのいい天氣で遊びに行きたくなった。しかもその日は、ちょうど寛永寺に大黒詣があって、図会に雪旦子の描いた絵[18]もあった。絵の中に、餅が入っている湯を美味しそうに食べている人の姿を思いつくと、実際に見に行きたい気持ちがいっそう強くなった。

そして、家によって着替えしてから、浅草と真土山に行き、御福の湯を飲みに大黒詣に行くプランを完璧に作った。いつも守っていただいている神様に、敬虔に御礼を言って、さっそく上野に出発した。寛永寺の境内に入って、いつものようにその広さに感嘆しながら、またしばらく歩くと、遠くから大こくの湯をもらっている人たちの行列が見えた。まさに、雪旦子の絵のようである。自分も時々スケッチすることが好きだが、プロの絵師にかなうものではないなと月岑は一瞬思った。

期待していた大こくの湯が、やっと目の前にあった。一口だけ食べると、食べ物にこだわる月岑は、やっぱりおいしいために食べるものではないと思ってしまった。しかし、「飲めば福智を得る」[19]と自分を説得しながら、全部飲んでいた。

---

[17] 『新版　江戸名所図会　上巻』、62 頁。
[18] 『新版　江戸名所図会　下巻』、96－97 頁。
[19] 『新訂　東都歳事記　上』、47 頁。

翌日は、例の八丁堀御礼の日である。ここに住んでいるのは、町奉行の与力と同心である。江戸は、平和なところだといっても、三百人も超えない[20]与力と同心に頼って、この巨大な都市の治安を維持することはやはり過酷な仕事量であろう。一生懸命に江戸の住民を守っている人たちに、御礼を言うために行く。その後、町奉行所、支配町などへの挨拶も、もちろん正月が終わる前にしなければならない。

この一ヶ月は、基本的に訴訟などの仕事に忙しくないが、様々なところに行って、人と会わなければならない。月岑の毎年は、このようにして始まるのである。人と人との間に、情報を伝達したり問題を解決したりするのは町名主の主な仕事であるから、人間関係をこのように重視していたのではないかと思う。その年これからの仕事をうまくできるように、月岑はあちこちに足を運んでいた。

⑵ 熱心な遊楽

それから、月岑は仕事以外の時間をどのように過ごしたかを見て行きたい。天保元年の正月、月岑の遊びは三日と五日二回しか見えないが、その後、月岑は名主の公務の傍ら時間を見つけて江戸で頻繁に名所巡りをしていた。

01・03　浅草並真土山（待乳山聖天宮）・上野大こく（寛永寺護国院）参る
　　05　三社（浅草寺三社権現）流鏑馬見ニ行、
02・10　初午夜ミや、市左衛門駕籠にて虎門（讃岐丸亀藩上屋敷内金毘羅大権現）・烏森（稲荷）・日々谷（日比谷稲荷）へ参る
　　15　服部坂龍幸寺・護国寺へ参る
　　16　明神様（神田明神）富へ行、
03・12　浅草開帳へ行、
　　15　芝かしま（鹿島神社）・御穂（御穂神社）祭ニ付、
　　17　浅草祭（浅草寺三社権現祭礼）へ行、
　　21　上野花見ニ行、
　　24　上野・谷中花見、注春亭へ行、
　　26　元八まん（砂村元八幡宮）へ花見に行、
③・06　元八かん宮へおしげ・おりん連参、櫻をもぎる、
04・09　中橋かんぎくへ行、夜九つ時かへる、
　　21　明神様（神田明神）太々講へ参る、
　　25　かさもりいなり（瘡守稲荷）様へ額かくべじしのがく納ニ行、

[20] 笹間良彦、『図説・江戸町奉行所事典』（柏書房、1995）43 頁。

05・10　虎御門（金毘羅大権現）へ参る、
　　12　かやば丁（茅場町薬師堂）へ参、
　　24　（日本橋）西河岸地蔵様へ参る、
　　29　駒込ふじ（富士浅間社）へ行、
06・02　飯倉くまの御祭（飯倉熊野権現祭礼）へ行、
　　05　天王様（大伝馬町天王祭礼）へ出る、
　　07　浅草・真土山へ参る、
　　10　虎御門へ参詣、
　　15　両国にてすゞむ（納涼）、
　　22　王子へ行、帰り船、
　　23　浅草・真土山へ行、
07・10　虎御門へ参、
　　15　中元、明神様（神田明神）へ参る、
　　29　明神様（神田明神）富へ行、
08・03　のろし上る、久次郎をつれ、市左衛門上野へ参る、
　　05　深川浄心寺身延山御開てうへ参、
09・15　明神様（神田明神）鳥居迄行、
　　17　明神様（飯倉神明宮）へ参る、
10・02　堀の内（妙法寺）へ参詣、
　　19　市左衛門、久次郎連雑司ヶ谷へ行、綱渡り見る、
　　20　薬研堀（両国薬研堀不動）へ行、
11・02　市左衛門、久つれ明神様（神田明神）へ行、
　　09　市左衛門・安間氏御寺参、浅草（浅草寺）観音様へ行、
　　10　やげん堀（薬研堀不動）へ久次郎つれ行、
　　17　浅草観音様へ参る、
12・17　浅草市（浅草寺年の市）へ行、
　　20　市（神田明神年の市）へ行、
　　30　上野へ参る、

以上は、天保元年一年間の日記から、名所廻りに関係する箇所を抽出した記録である。名所廻りに行ったのは、総計四十四日あった。寺社参りに行ったのは、三十三日あり、四分の三を占めている。

三月のとき、花見は四回も行ったのである。廿一日、国学の先生と一緒に上野へ花見に行ったのである。『江戸名所花暦』によると、この時の上野は櫻が一番きれいだった[21]。そして、廿四日は、同じく名主である姉婿と家主と行っ

[21] 市古夏生・鈴木健一校訂『新訂　江戸名所花暦』（筑摩書房、2001）32 頁。

國立政治大學 National Chengchi University

たのである。おそらく、月岑が上野で見た櫻はあまりにきれいだったので、また行きたくなり、今度は他の人を誘って行ったのである。同じところに行っても、同行した人が違ったら気持も変わるだろう。二回目、上野の花見に行った仲間は、月岑と年齢が近かったためかもしれないが、花見をしてから、また駐春亭という料亭で一緒に食事したのである。

⑶ 江戸の人々を熱狂させたイベントの制作

天保元年の日記には、一つの大事な記録が見られなかった。それは、神田祭に参加する記録である。江戸の祭礼といえば、山王祭と神田祭は、将軍上覧の天下祭としてよく知られている。天下祭と呼ばれていたのは、将軍がこの祭りをご覧になるので、祭りの行列が江戸城に入ったからだと言われている。町人たちにとっては、大変重要なイベントだと言える。特に祭礼の企画を担当する名主たちは、この時期になると皆精神を集中しており、このイベントを完璧に成し遂げることを望んでいた。

この年の日記に見られなかったのは、この二つの祭りは隔年に行われたからである。山王祭が本祭りのときは、神田祭が陰祭り[22]ということで両社が交代で本祭りを行うかたちになっていた。天保元年はちょうど山王祭が本祭りのときであった。

よく寺社参りをする月岑は、個人の趣味として様々な祭礼を数多く見てきたのである。祭りを見る人々は、どのような内容を楽しめるか、行列の道筋をどのように設計したほうがよいか、月岑は自分の心得を持っていたのであろう。次は、月岑日記から、天保二年と四年連続二回の神田祭に関する記録を抽出したものである。祭り前後の月岑の仕事の様子を見たいと思う。

天保二年（1831）

06・12　山吹にて御祭礼寄合、付祭鬮引、

07・02　明神御祭礼附祭出物極ル、

12　奈良屋へ御呼出し、但、祭礼之義、

17　祭礼寄合、山吹、但し延る、

19　祭礼寄合、山吹、夕方地震、夜四つ帰る、

26　祭礼書上、九つ過池の尾寄合、奈良屋へ納る、夕方かへる、

---

「上野（一山のさくら種々ありて、開花の遅速ありといへども、みなここに挙ぐる。）当山は東都第一の花の名所にして、彼岸櫻より咲き出でて一重・八重追々に咲きつづき、弥生の末まで花のたゆることなし。」

[22]『新訂　東都歳事記』によると、「神田蔭祭り（隔年、祭礼の休みどしなり。産子の町々かかげ祭りと号して、軒挑灯をいだし、神酒所大幟を立て、酒樽・蒸籠等つむこと祭り年のごとし。また種々の飾りもの等あり。）」（111－112 頁）

08・08　奈良屋祭礼町御呼出、長次郎代ニ出ス、
　　25　祭礼之義ニ付、月行事奈良屋様へ呼出し、良助出ス、
09・04　奈良屋殿へ祭礼之義ニ付呼出、心付被申渡候、祭礼外神田之分下見、神主宅也、夜帰る、
　　05　祭礼内神田之分下見、神主宅、七つ時過帰る、
　　13　竹内氏にて躍内下見、あたか躍見ニ行、茂太子、同所へ来る、
　　15　山吹へよる、明神様へ参詣、竹内・平田・茂太・明勘同道、いせるにて支度、扇面亭より扇出来、為持来る、月朧、当年ハ御祭礼廿一日ニ延、
　　16　奈良や御呼出、後、山吹へよる、明神様へ久次郎連参、
　　20　御祭礼ねり相済、夜、竹内氏へ行、山吹へも行、
　　21　御祭礼無滞相済、朝、なべ丁・新石町躍台、櫻馬場へ不行、未明ニ直ニ田安御門迄行、夜、東林にて同役支度、市左衛門一人、川安へ行、九ツ過帰る、
　　22　昼過、御礼参ニ行、佐柄木・竹内・飯塚・茂太郎同道、寄り所なし、直ニかへる、参詣夥し、
　　23　昼過、明神様へ参る、茂太郎子酔来る、
10・07　南へ御呼出、祭礼御誉、

天保四年（1833）
06・06　夜、山吹にて祭礼丁寄合、鬮を引候処、三河町四丁目、踊に当る、
　　20　夜、山吹にて付祭町寄合、
　　28　夜、山吹にて祭礼寄合、仕様書集る、
07・09　朝、喜多村へ祭町鬮呼出、
　　24　一日祭礼扇認る、
　　25　夜、祭礼書上持寄（寄）合、山吹、
08・08　夕方、山吹にて祭礼之事ニ付、内神田同役斗寄合、
　　17　今夜、三河町四丁目附祭下見宅にていたす、明七つ前に一同帰る、
　　25　喜多村へ祭礼町呼出、扇二十本地紙出来来る、
　　28　祭礼踊下見相済、
09・01　喜多村へ祭礼同役呼出し、
　　03　夕方、山吹にて祭礼寄合、行事連る、
　　06　明神様へ参る、
　　07　夕方、山吹、手拭持寄之積り、市左衛門出る、多丁ねり物・かるわさ下見、久次郎遣す、
　　08　母、海賊橋出しやへ行、
　　09　横大工丁ねり物・踊り見ニ行、扇四十本出来来る、多町鐘馗の出し、今日町内へ引入る、
　　10　明神様御供物・御礼・御神酒来る、

國立政治大學 National Chengchi University

13　多町二丁目ねりニ付、
14　四丁目ねり、
御祭礼夜宮也、夜、おどりて一同来る、おどりて連斗り食事出す、遠藤・神谷・石渡・正法院・一中節師匠の女五人来る、勘四郎来る、おさと・栗崎道機殿・おかつ殿・おしけ・おりん来る
15　天氣よし、神田明神御祭礼、無滞相済ム、暮てかへる、東林へはくたびれ候故よらず、踊師匠坂東おまん・さとミ太夫・徳左衛門、礼ニ来る、
16　朝、麻上下にて御礼参ニ出る、昼後、河津・安奈同道にて、又着流しにて御礼参に行、東林にて支度、
19　雨ふる、八丁堀・町年寄衆御礼ニ出る、
27　夜、山吹、祭礼勘定寄合、
10・06　南へ御呼出、祭礼御誉、
26　夕方、山吹、祭礼勘定割合之義付寄合、
29　祭礼勘定書上帳、山吹へ持寄、夜八つニ帰る、

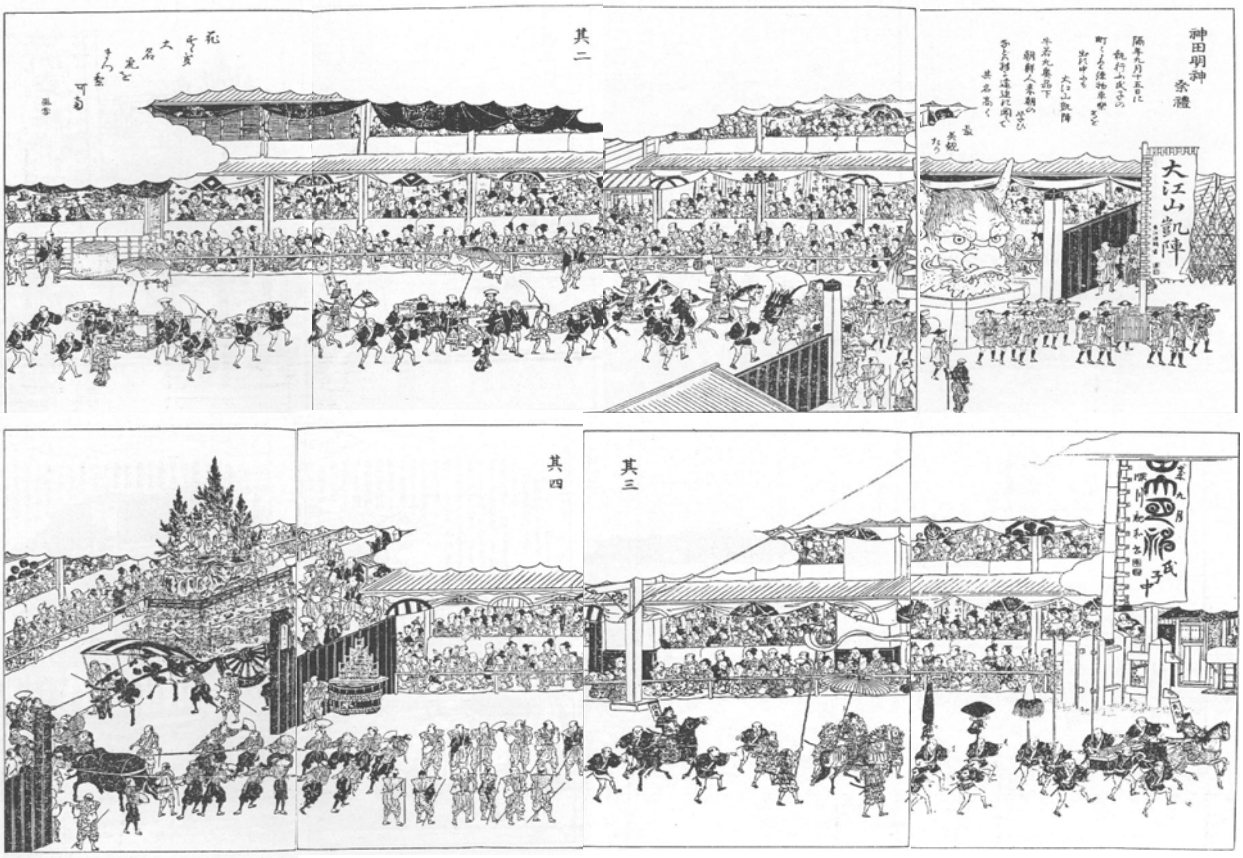
神田明神祭礼は、九月十五日であるが、制作の作業は約三ヶ月前に始まったのである。例の会議を開く料亭で、初寄合をはじめとし、名主たちは籤を引き、当年の担当する仕事の内容が分配される。そして町年寄に呼び出され、祭礼について報告しに行く。それから、おそらく名主たちは自分の仕事をそれぞれ前へ進めていくだろう。祭礼の当日に、行列に出る練り物の山車、踊り屋台など、そして一緒について練り歩く芸人たち、軽業も一つ一つ下見しなければいけない。仕事とはいうものの、踊りの稽古などのような祭礼の細部を事前にチェックすることも楽しい、と月岑らは思ったことがあるのではなかろうか。おもしろいと思いながら軽業の下見をしたときには、自分の子供も行かせたであろう。

九月に入って、もうすぐ神田祭なので、この時の日記には、ほとんど毎日祭礼を準備する仕事について書かれていた。皆が楽しんでもらえる祭りを作りたがっていたので、できるだけ事前の準備を完璧にするように努力していたのであろう。連日の繁忙を経て、いよいよ盛大なイベントの当日である。（図[23]）

周りの人々の熱狂ぶりを見て、月岑も他の仕事から得られない満足感を感じたのではないかと思う。この江戸の盛事の終わりに従い、月岑の長い一日も終って、約三ヶ月に持続する緊張感も、やっとこのときになくなっていたのであろう。最後に、その満足感を持って、自分の日記に「御祭礼無滞相済」と書き、また今度の神田祭を期待し始めたと思われる。

[23] 『新訂　東都歳事記』「神田明神祭礼」図。（100－101 頁）

大黒詣




「神田明神祭礼」

## 第四節　遊楽の特色

江戸時代の後期の江戸に住んでいる人にとって、自分の一番大好きな余暇の過ごし方を選ぶのは、難しいことだったであろう。それは、選択肢が想像しがたいくらい多かったからである。大都市に住んでいる人が、都市ならでは提供できる消費生活についての多様性を楽しめるというのは一般であるが、江戸にある多彩な遊楽は特別な理由がある。

当時の江戸は徳川幕府の将軍の住んでいる江戸城の城下町であり、参勤交代で来る大名たちはここに臨時の住所があった。臨時の住所とはいえ、決して簡単な住まいで済むことではなかった。江戸在住の生活に対する要求は、屋敷の広さが一番基本であった。大名屋敷のほかに、徳川将軍の旗本と御家人の屋敷も存在していた。広い武家地に次いで、お寺や神社などの寺社地が江戸の小さくない面積を占めていた。江戸の土地構成の地図を見ると、人数が最も多い町人が住める地域は驚くほど狭かった[24]。町地が、現在の東京都区部の人口密度の四倍以上という過密ぶりであった。

町人が一日の仕事が終わってから、鳥籠のような家に帰り、横になってちゃんと休みを取ろうと思うと、付近にある大名屋敷の広さが思い出されてきた。毎日のストレスがこのように少しずつ溜まってきて、江戸や武家の人に対する不満も高まり、次はどのようなことが起こるのは想像しにくいことではなかろう。

支配者である徳川幕府も、多分このようなことを予想し、何かが起こる前に江戸に住んでいる人が気分転換しに行ける場所を作ったのである[25]。

一方、江戸にの人々は、このような作られた名所をよく利用することで、支配者側の善意を応えた。さらに当時の町人社会には、様々な遊楽に消費することを励ます雰囲気があったようである。江戸の人は、このような遊びにお金を惜しまないことを「粋」と賞賛していた。「粋」というのは、ライフスタイルに対するセンスである。貧富、身分、職業とは一切関係なく、本当に大事なのは、もう明日が無いような、今を楽しもうという生活に対する態度である。実際に遊楽に大金を使えるのは、豪商と呼ばれた金持ちの人だけかもしれないが、

---

[24] 『江戸学事典』により、「近世中期には、江戸の人口は武家五十万余、町人五十万余、合わせて一〇〇万を優に超えた。しかし江戸の住空間は、そのほとんどが武家によって占められ、町人のそれは非常に狭小であった。幕末の状況を推測することができる明治二年（1869）の東京の土地調査によれば、おおよそ武家地は 1169 万坪で 69%、町地は 270 万坪で 16%、寺社地は 266 万坪で 15%であった。」（22 頁）

[25] 「江戸は生活の場として市内の整備が行われ、人為的な名所がつくられていく。たとえば、隅田川の土堤や王子の飛鳥山、品川の御殿山などに桜や楓が植えられるなど、四季の江戸庶民のための行楽地が設けられるようになった。」（『江戸学事典』、61 頁）

そのような遊び方はまったく社会に影響を与えなかったとは言えない。

都市住民としての江戸の人は、気晴らしへの需要のため、遊楽に大量の金銭を投入することで遊楽のより以上の多様化を促したのであろうか。あるいは、遊楽の多様性が人々を喜んでお金を出させたのであろうか。どちらのほうが確実なのか分からない。多分、互いに作用していたのであろう。

ところが、為政者としての徳川幕府は、この社会上の共通する気風を楽しく受け入れるわけではなかった。それは、その後、江戸時代に最後の大規模の改革である天保の改革の中で、一つの改革の重点になったことで分かる。この天保の改革という政治運動は、従来、財政に得意でなかった幕府が、飢饉で激化した社会動乱に応じるため、努力して一連の政策を出した活動である。その中で、奢侈禁止の実現を期待する倹約令という布令が出されたのである。

この布令が出されると、江戸市民は幕府の過度の厳しい姿勢に敏感な反応で示している。町の呉服屋の売り上げはすべて減少した。大工などの職人も新しい工事がないため仕事ができなくなった。また芝居町や吉原などの遊楽場所も経営不振に陥ったのである[26]。

しかし、それにしても、江戸の人は遊び好きの生き方を変えなかったのである。この倹約令は、ほかの法令と同じく失敗で終わった[27]。

遊びは、江戸の人の生活にある欠かせない地位を占めていたのである。そこで彼らは何を楽しんでいたかを見てみなければならない。

春は、江戸の人にとって大切な季節である。年頭の挨拶、お正月を迎えるなどの重要なことは、この季節にしなければならないからだけではない。もっと意義のある理由は、春は花見の季節であることである。長い間、窮屈な生活空間に暮している江戸人にとって、花見に行くのは、自然に親近し、鬱を散じることができることになるのである。しかしながら、時々一緒に行く仲間の重要性は、その見ることのできる花自身より大きかった。花見という活動を媒介にして、人と人の間の付き合いはさらに心理的に緊密になっていく。家に住んでいるときの、距離上の、いらいらさせる、そういう緊密ではない。（約二百年後の日本では、花見の存在はさらに社交上で大切になったであろう）

花見といえば、江戸の人は櫻が心に浮かぶ。これは、岡山鳥の『江戸名所花

---

[26] 『幕藩体制の展開と動揺（下）』、229 頁。
[27] 『概説日本史』、169 頁。

暦』という著作の中にある絵が証明できるであろう。岡山鳥は、どのような人か、まず見てみよう。彼についての記録は少ない。しかし彼は戯作者として後世の人に知られている。彼は戯作を書きながら、武家奉公をしていた。奉公先を失って、浪人になった時期もあった[28]。

『江戸名所花暦』は 1827 年に出版された。その年、斎藤月岑は二十三歳だった。彼らは、多分互いに知り合ったであろう。それは、月岑の自筆の『江戸名所図会の由来』に、自分の父が『江戸名所図会』の筆耕の一部を岡山鳥に依頼したことが書かれているからである[29]。岡山鳥が『江戸名所花暦』を執筆したのは、『江戸名所図会』の創作に参与したからである可能性が高い。

前述の櫻の絵[30]に戻ろう。この絵の創作者は、長谷川雪旦である。彼のもう一つの有名な作品は、『江戸名所図会』である。『江戸名所図会』は、後で出版したもので、「花暦」より筆致はもっと精巧になり、大規模の俯瞰図も現れている。

その俯瞰図は、上半が上野東叡山を俯瞰する様子である。絵の下半部には、雪旦は違う種類の櫻を描いた。このように各種の櫻を細かく描くのは、当時の櫻に関する知識への需要に関係があるからであろう。櫻に関する知識を求めている人がこの絵で満足したかどうかはわからない。しかし雪旦は芸術家の目を通し、巧みな手つきで、櫻はこのように種類が多いことを伝えたと推定することができると思われる。

花見の名所である上野から離れて、両国橋界隈へ行ってみよう。ぽんと花火の上る音が遠くから耳に入ってくると、夏に入ったことが分かった。うちわや扇であおぐことだけで涼をとる江戸の人は、季節の変化を私たちの想像以上敏感に感じたであろう。この日は何月何日か分からないが、五月二十八日から八月二十八日までの、この三ヶ月間にある一日だと推定できる。川開きと呼ばれる第一日から、両国に来ると、大勢集まってくる人が見える。川の上に、行ったり来たりする舟が多くあり、笑い声や物売りの叫ぶ声は、あちこちから聞えたであろう。

岡山鳥は、この納涼のにぎやかな風景について、

> 酒うる船、肴うる船、菓うる船は酒肴の尽きたらんとおもふ船のあたりを漕ぎあるき、また風流の遊客は、隅田川の上のかたにふねをのばせ、簫・

---

[28] 『新訂　江戸名所花暦』

[29] もとは、朝倉無声の「江戸名所図会編纂始末（下）」（『此花』一五号、大正二年一二月）に引用されているらしい。しかし、現在手に入りにくい貴重な史料である。ここは、筑摩書房出版の『新訂　江戸名所花暦』の後にある解説から、再引用したのである。

[30] 『新訂　江戸名所花暦』上野東叡山・櫻の種類図　34、35 頁

篳篥などを吹きすさみてなぐさむもあり[31]。

と描いている[32]。

打ち上げられると、真っ暗な空を一瞬に明るくする花火は、二大花火屋として知られる玉屋と鍵屋が作ったのであろうか[33]。この二つの花火屋は競い合うことで、「喝采の声とともに巨利を得た」[34]と言われた。しかし、1843 年に、横山町で起こった事故によって、その激しい競争は、終わりを告げる。それは、四月のある日、玉屋は自宅から失火を出したのである。[35]火事を聞くと、皆パニックになると言ってもよいその時代、火事を起した家が処罰を受けるのは当然である。しかも、火元は花火を業とする人である。それはなんと恐ろしいことであろう。その事件が起こった後、廃業した玉屋の姿が隅田川の上に消えた。

納涼のシーズンが終わると、だんだんと涼しくなる。江戸の町の中を歩くと、市民の着ている服も厚くなってくる。今度は、騒々しい町から離れて、江戸の近郊に行ってみよう。六阿弥陀に参詣する人は、きっとこの付近に来る。林立する植木屋が目に入ってくると、やがて目的地に到着する。ここは、江戸市中より少し距離がある染井村である。しかし、江戸の人は、漠然として巣鴨・染井辺りと呼んでいたそうである[36]。

九月になると、染井の植木屋といえば菊見である[37]。江戸時代に菊を愛する歴史は長く、1757 年出版された『菊経』のさかのぼることができる。それは、当時の守山藩主松平頼寛が書いたものである。その中に、菊の種類、形状、栽培法などについて細かく記されている。菊のような園芸植物は、その栽培に周到な温度調整と細心の肥培管理が要求されるのである。すなわち、大量の金銭と時間を投入しなければならない。一般の庶民にとって、菊の栽培は難しいことかもしれないが、染井に来ると、より合理的な入場料[38]で植木屋のプロの職人の成果を楽しむことが可能である。

菊見について、斎藤月岑は 1838 年に出版された自分の著作である『東都歳事記』の中で、植木屋の創意に富んだ発想である菊人形という流行に少し注解を付けた。それは、彼の十四歳の前の何年間のことである。

---

[31] 『新訂　江戸名所花暦』145 頁
[32] 『新訂　江戸名所花暦』両国橋納涼図　140、141 頁
[33] 『江戸学事典』368 頁
[34] 『五月雨草紙』。『大江戸万華鏡』からの再引用。
[35] 『江戸府内　絵本風俗往来』。『大江戸万華鏡』からの再引用。
[36] 『新訂　東都歳事記　下』128 頁
[37] 『新訂　東都歳事記　下』染井看菊図　129 頁
[38] 西山松之助『江戸庶民の四季』99 頁

文化（1804－1818）の末、巣鴨の里に菊花をもて、人物鳥獣何くれとなく、さまざまの形を造ること時行出して、江府の貴賤日ごとに群集し、道すがら酒肆・茶店をつらね、道も去りあへぬまで賑はひし頃[39]

と、彼は思い出している。

けれども、彼の菊に対する思い出はそれだけではない。

父とともにこのわたりめでありきしも、幼き頃のことにして、今は二十とせの昔とはなりぬ。その後二、三年にしてこのこと絶えたり。されど常ざまの花壇は今にかはらずして年ごとに盛んなり。[40]

彼の父は、彼の十五歳の時にこの世を去った。その菊人形のブームは、ほんの一時的であるが、彼の人生の中にある一番素晴らしい部分を象徴しているのであろう。

秋に入ると、よくうら寂しさを感じるように思われる。日記やら出版する著作やら、月岑の残した文字の記録の中に、自分の父に関することはめったにない。染井から神田にある家までの帰り道は、やや長かったから、彼は十年くらい前に亡くなった父のことを思い出したであろうか。または、彼と自分の父と一緒に過した時間は、あまりにも短かすぎたため、菊人形は僅かな共有した記憶の一つであったろうか。残念ながら、私たちは現存の史料では知ることができない。

このような数多い種類の遊びに、江戸の人は、現代の人の目から見ても大量だと思う時間とエネルギーを投入していた。この現象は、ちょうど月岑の成長期である文化・文政年間のとき（1804－1830）、一つのピークになったと思われる[41]。

これに対し、その時期の江戸を振り返ってみて、イベントの混雑に身を投じることは、当時の支配者たちへの不満などを情緒的に示すことに関連すると考える研究者たちがいる[42]。これは、権力関係の視点からこの文化現象を理解しようと企てる解釈だと私は思う。江戸時代の身分制度を考慮すると、このような解釈そのものは一定の意義を持っていると思われる。しかしこの観点は一面

[39] 『新訂　東都歳事記　下』128 頁
[40] 『新訂　東都歳事記　下』128 頁
[41] 『大江戸万華鏡』
[42] 西山松之助の行動文化論。

的すぎると私は少し疑問に思う。そもそも、この文化現象は人間の考えと行動から成り立っているのである。人間を理解するのは、もともとかなりに困難なことである。その上、この現象の背後にいるのは、一人の人間ではなく、数え切れないほどの人間なのである。一つの解釈で割り切れるものではない。一人の行為でその当時の一つの文化現象を解釈しようとすると、客観性がなくなりやすいと考えられる。その上、単に権力関係の観点から、人の行為を理解することは人間の思考を簡単化すぎる恐れがあるのではないだろうか。もし同時代、同階層の人の史料をもっと集めて分析すれば、さらに精確な解釈を得られるのではないだろうか。

小結

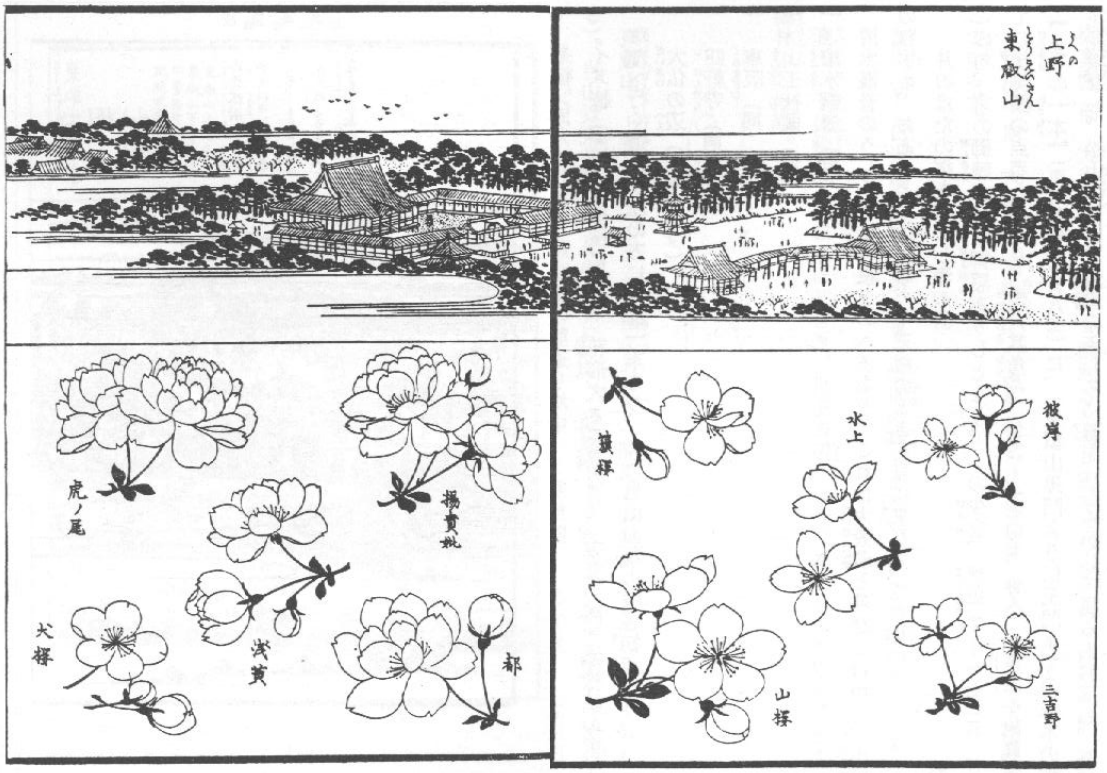
この章では、主に斎藤月岑の日記を通して、町名主の生活実態を観察した。

斎藤月岑の書いた日記（1830－1853 年分）は、内容が大きく三種類に分かれると考えられる。名主の勤務、家族と年中行事、文化活動（著作の出版、文化人との往来）である。記述の内容からみると、名主として斎藤月岑は勤務に忙しい生活をしていたことが分かる。しかし彼は仕事の合間に頻繁に名所廻りをしていた。後の著作のために、足を運んでいたと考えられる。

もう一歩進んで内容をみると、斎藤月岑の性格の中の旺盛な行動力は代表的な特色だと言える。毎年の年頭に必ずある新年挨拶の記録から、月岑の人間関係を重視することが分かる。忙しい仕事にも関わらず、名所廻りの記録はびっくりする多い。その中、寺社参りは一番頻繁に行われている。二年ごとに日記に出る神田祭の記述によると、月岑がこの大事なイベントの制作を楽しんでいたことが分かる。このような多彩な生活を送ることができるのは、旺盛な行動力をもっていたからであると考えられる。

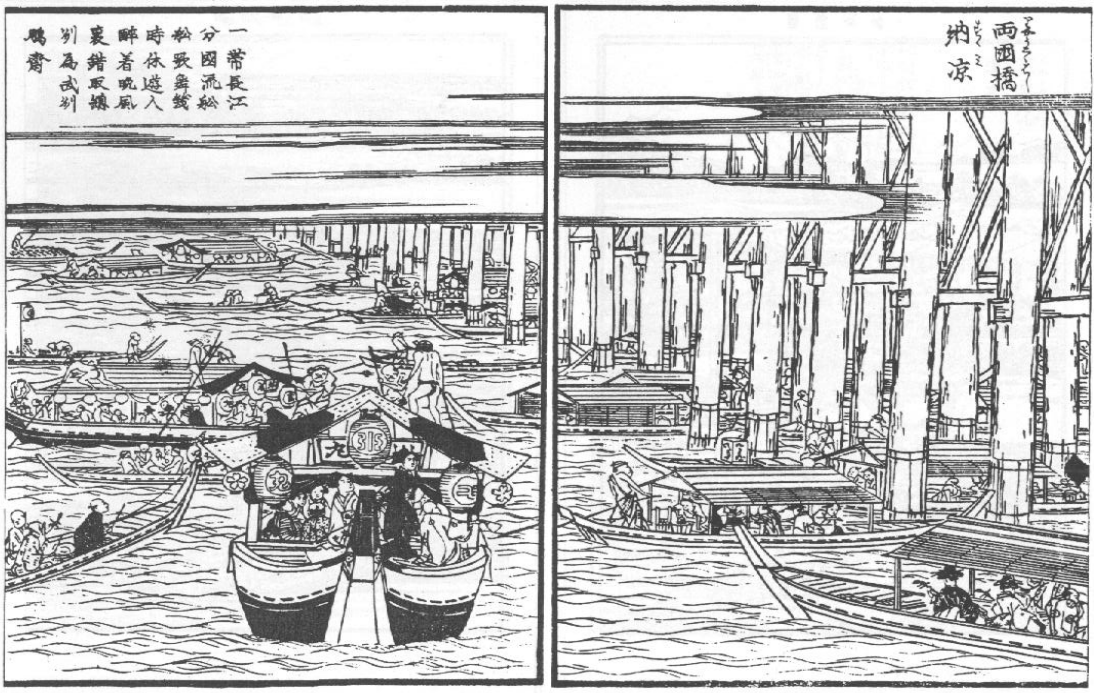
江戸の人の遊楽の特色について、まずは多様性である。幕府側の意図的に名所を作ることと当時の人々のライフスタイルとは、遊楽の豊富性を促進した。さらに、江戸の遊楽には季節性がある。例えば、春は花見、夏は花火、秋は菊見など、ある季節が来ると、必ず何かをするのである。

本章では以上のことを明らかにした。




上野 東叡山

上野東叡山・櫻の種類図




両国橋 納涼　一帯の長江国を分かちて流る／船船の歌舞幾時か休まん／遊

両国橋納涼図